

# 西摂北部地域における須恵器生産の展開と変容

— 編年の再検討を中心に —

稲本 悠一

## 1. はじめに

西摂北部地域にあたる兵庫県三田市では、約 60 基の須恵器窯跡が確認されており、現在も市内に「末」の地名が残っているように、古くは須恵器生産の盛んな地域であった。これらの窯跡はその分布から「三田末窯跡群」、「木器窯跡群」、「相野窯跡群」、「見比窯跡群」の 4 つの窯跡群に大別され、断絶はみられるものの、古墳時代から鎌倉時代まで須恵器が生産されたことが明らかになっている。また、相野窯跡群の周辺には丹波焼の窯跡が多数みられ、現在も丹波焼生産地として著名な立杭地区と近接することから、研究史上では丹波焼との関係も注目されてきた（図 1）。

以上の状況に鑑みれば、当該地域は一地方における須恵器生産、引いては窯業生産の変化を通時代的に検討する格好のエリアと評価できる。本論では、筆者が強い関心を有する、古代から中世への窯業生産の変化とその過程を解明する基礎作業の一つとして、編年の再検討を中心に、西摂北部地域における須恵器生産の展開と変容を再検討することにしたい。



1: 郡塚 1 号窯 2: 井桶窯跡群 (第 2・3 号窯) 3: 乾窯 4: 郡塚 2 号窯 5: 川端窯 6: みどろ池窯 7: 落合 1・2 号窯 8: 地福窯跡群 (1～6 号窯)  
9・10: 木器 1・2 号窯 11: 貝谷窯 12: 西相野窯 13・14: 向上・古城 1・2 号窯 15: 水ヶ下窯跡群 16: 古城山 1 号窯 17～21: 古城 1～5 号窯  
22: 木戸窯 23: 中池ノ内 1 号窯 24: 萩ノ尾窯 25・26: 西谷池 1・2 号窯 27: 寄合谷窯 28: 井ノ方窯 29: 見比 1・2 号窯 30: 木器 4 号窯

図 1 西摂北部地域の須恵器窯跡とその他の窯跡の分布 (兵庫県遺跡地図「67 藍本」・「68 木津」を元に作成)

## 2. 先行研究と現状の課題

### (1) 先行研究

当該地域の須恵器研究は、1970年代から1980年代にかけて、青野ダム建設、近畿自動車道舞鶴線建設などに伴う発掘調査事例の増加により著しく進展した。その早い段階のものとして吉田昇の論考がある。吉田は丹波篠窯や東播磨の神出窯の研究成果を援用しつつ、当該地域の窯跡と消費地遺跡双方の資料をⅠ～Ⅳ期に区分し、古代から中世の須恵器変遷を示した(吉田1988)。その後は、相野窯跡群の発掘調査報告書刊行により、平安時代中期の様相がより鮮明となる。報告書では、相野窯跡群をⅠ～Ⅶ期に分ける編年案と9世紀第4四半期から11世紀第1四半期という生産年代が示され(兵庫県教育委員会1992)、最も古い向上・古城窯跡群が篠窯の技術系譜を引く可能性が示唆された(山田1992)。また、菅本宏明は西摂北部地域における古代末期から中世前半の土器様相について検討し、11世紀前半まで回転台土師器と須恵器を主とするが、11世紀中葉を境に東播磨の影響を強く受けながら新たな在地土器(糸切り土師器や黒色土器)の生産を加えたとした(菅本1993)。

近年では、片山博道が平安時代の西日本の須恵器平高台椀(本論の「椀B」)を検討し、摂津が京都市系緑釉陶器生産地から強い影響を受けたこと、平高台椀の変遷が播磨とは異なることを指摘した(片山2009)。加えて、中世の井ノ方窯・見比窯で生産された鉢が東播系須恵器鉢に類似すること(松本2012)、奈良時代後半には丹波・丹後の須恵器と共通の特徴がみられること(稲本2023)が指摘されるなど、他地域との比較を通じて各時代の須恵器生産への理解も深化しつつある。

また、丹波焼との関連については、須恵器生産の技術基盤があった当地に東海地方の瓷器系技術が移植され、12世紀第4四半期に丹波焼が誕生したとみられていたが(森田1991)、丹波焼最古級段階の三本峠北窯跡の研究が進展し、須恵器の技術系譜を引く可能性は低いとされた(松岡2022)。

### (2) 現状の課題と本論の検討内容

以上のように、当該地域の須恵器研究は、編年や他地域の生産地との関係、そこから一步踏み込んだ技術系譜に関する議論が中心を占めてきた。先行研究を通覧し、筆者が大きな課題と感じたのは、編年と年代といった基礎的検討が不十分な点である。特に、各地において地域差が顕著となる平安時代の相野窯跡群については、後半の時期区分の指標に少数器種(本論の「突帯短頸壺」「突帯双耳甕」「小皿」など)の有無が重視されたが(岡崎1992)、生産量の少なさなどから発掘調査で検出されていない可能性もあり、時期区分の根拠とするには慎重な判断が必要である。また、主要器種である椀に注目した片山の研究(片山2009)は、その視点こそ高く評価されるものの、先の報告書の相対編年を用い、平安京編年と直接対比を行ったため、須恵器の変遷や年代観に違和感を覚える点も少なくない。須恵器生産の変化を的確に捉え、他生産地との関係や技術系譜、さらに生産主体や当地域における歴史的位相などの検討を進めるうえでも、須恵器生産の展開に関する基礎的検討が必要である。

以上を踏まえ、本論では西摂北部地域の須恵器編年を再検討し(3章)、各期の評価について予察的に論じながら(4章)、当該地域における須恵器生産の展開と変容の様相を捉える。

## 3. 西摂北部地域の須恵器編年

西摂北部地域では、古墳時代後期から中世までの須恵器窯跡が確認されているが、本論の目的は古代以降の須恵器の変化を捉えることであり、7世紀前半の様相が不明瞭なため、7世紀後葉以降の事例を扱うことにする。

## (1) 器種分類と変遷

本論では表1・図2に示した器種分類を基に、各窯跡資料の器種構成を把握し、類似点に注目しつつ各資料を配列することでその変遷を把握した(表2)。時期区分は、器種構成の大きな変化を大画期(ローマ数字)の指標とし、さらに主要器種の形状や制作技法、平安時代以降の主要器種である椀については口径の分布(図4)も考慮しつつ、小画期の設定(アルファベットを付す)を行った。結果、当地域における古代以降の須恵器生産を大別5期、小画期を含め13期に区分した。次節では各期の様相をみていく。なお、以下( )内に示した数字は図3の遺物番号を示す。

## (2) 時期区分(表2・図3)

I期 かえりを有する杯蓋(蓋A a)が生産される時期。三田末窯跡群で生産がみられる。かえりを有さない杯蓋(蓋A b)の有無で2時期に細分できる。

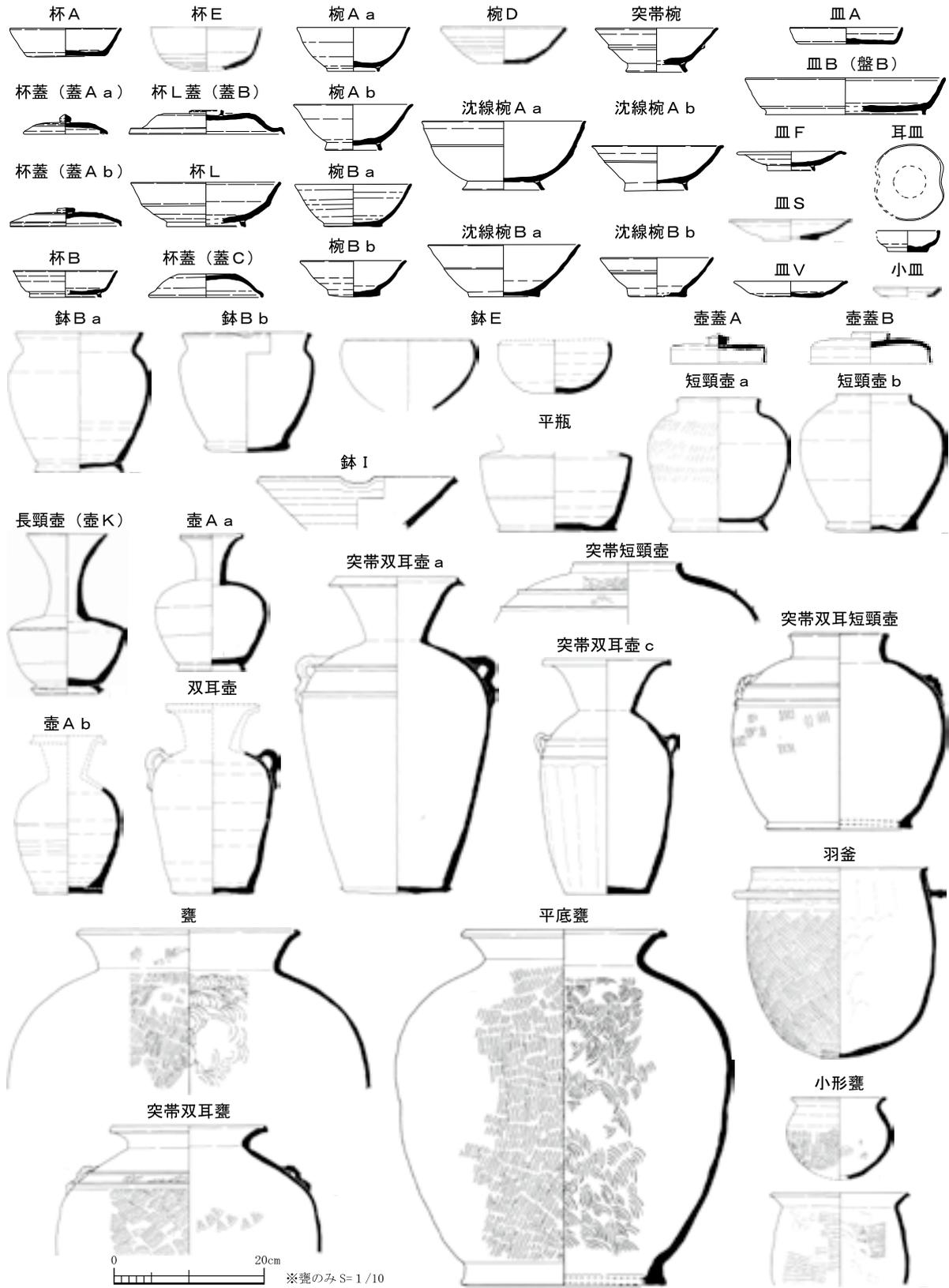
I A期 蓋A aのみが生産される時期。井桶窯跡群第2号窯が該当する。杯Aは底部に丸みを有し、杯Bは輪高台が底部縁辺よりかなり内側に貼り付けられる。なお、蓋A aは小形のものも存在しており、杯Aと組み合っていた(いわゆる杯G的な様相を呈していた)可能性がある。

I B期 蓋A aと蓋A b、2種の杯蓋が生産される時期。井桶窯跡群第3号窯が該当する。杯A・

表1 主な器種の分類と特徴

器種	特徴	器種	特徴
杯A	無高台の杯。	耳皿	円盤高台を有し、口縁部の2方向を内側に屈曲させた皿。
杯B	輪高台を有する杯。	小皿	口径約10cm以下の小型の皿。底部は回転糸切り。
杯E	金属器模倣の杯。体部は丸く、口縁端部に面をもつ。	鉢B	体部と口縁部境に屈曲を有する鉢。全体の器形で細分。
杯L(稜椀)	体部半ばに稜を有する椀。金属器模倣器種。	鉢B a	輪高台を有し、体部が張るもの。
杯蓋(蓋A)	つまみを有する蓋。かえりの有無で細分。	鉢B b	円盤高台を有し、体部が張るもの。
蓋A a	内面にかえりを有するもの。	鉢E	口縁部が大きく内湾する鉢。いわゆる鉄鉢に近い器形。
蓋A b	内面にかえりを有さないもの。	鉢I	体部から口縁部まで屈曲を有さない鉢。片口を有する。
杯L蓋(蓋B)	環状つまみを有する蓋。杯Lと組み合う。	長頸壺(壺K)	肩部に稜を有する広口の長頸壺。
杯蓋(蓋C)	つまみのない蓋。	壺A	体部に丸みを有する広口の長頸壺。高台の形状で細分。
椀A	輪高台を有する椀。	壺A a	輪高台を有するもの。
椀A a	体部に丸みを有するもの。	壺A b	円盤高台を有するもの。
椀A b	体部が直線的で口縁端部は外反するもの。	双耳壺	肩部に1対の耳を有する壺。
椀B	円盤高台(平高台)を有する椀。細部形態で細分。	突帯双耳壺	貼付突帯を有する双耳壺。突帯の数で細分。
椀B a	内面見込みに段を有さないもの。	突帯双耳壺 a	肩部に2条の突帯を有するもの。
椀B b	内面見込みに段を有するもの。	突帯双耳壺 c	肩部に1条の突帯を有するもの。
椀D	無高台の椀。底部は回転糸切り。	壺蓋A	つまみを有する壺蓋。短頸壺と組み合う。
沈線椀A a	椀A aの体部に沈線を施すもの。	壺蓋B	環状つまみを有する壺蓋。短頸壺と組み合う。
沈線椀A b	椀A bの体部に沈線を施すもの。	短頸壺	短く直立する口縁部を有する壺。高台の形態で細分。
沈線椀B a	椀B aの体部に沈線を施すもの。沈線が段状になるものや底部回転糸切りのものも存在する。	短頸壺 a	輪高台を有するもの。
沈線椀B b	椀B bの体部に沈線を施すもの。	短頸壺 b	円盤高台を有するもの。
突帯椀	体部半ばに貼付突帯を有する椀。	突帯短頸壺	貼付突帯を有する短頸壺。
皿A	無高台の皿。内面口縁端部に沈線を施すものもみられる。	突帯双耳短頸壺	1対の耳を有する突帯短頸壺。
皿B(盤B)	輪高台を有する皿。器形は杯Bと近い。器形は同様だが、口径が25.0cmを超えるものを盤Bと呼称。	甕	丸底の甕。
皿F	口縁部が外反し、輪高台を有する皿(施釉陶器模倣)。	平底甕	平底(円盤高台風)の甕。
皿S	円盤高台を有する皿(施釉陶器模倣)。	突帯双耳甕	肩部に2条の突帯と1対の耳を有する甕。
皿V	口縁端部を外方に引き出す皿。	羽釜	土師器羽釜の模倣。口縁や下に踵を有する。
		甕	土師器長胴甕の模倣。
		小形甕	土師器甕を模倣した小形の甕。

器種名は『窯跡群大谷3号窯の研究』(大阪大学考古学研究室窯跡調査団2012)を参考にし、これにないものは新たに追加した。特に記述のない限り、供膳具の底部切り離しはヘラ切りによる。



杯蓋 (蓋A a) : 井涌窯跡群第3号窯 杯A・杯蓋 (蓋A b)・杯B・杯L蓋 (蓋B)・杯L・皿A・皿B (盤B)・長頸壺 (壺K) : 川端窯 杯蓋 (蓋C)・碗A a・碗B a・碗B b・沈線碗B b・皿F・皿V・耳皿 : 貝谷窯 碗D・鉢I・小皿 : 井ノ方窯 沈線碗A a・沈線碗A b・沈線碗B a・鉢B b・平瓶・突帶双耳壺 a・甕 : 古城山1号窯 突帶碗・短頸壺 b・羽釜・小形甕 (下) : 古城1号窯 皿S・鉢B a・鉢E (右)・壺A b・双耳壺・壺蓋A・壺蓋B・短頸壺 a : 向上・古城1号窯 鉢E (左)・壺A a : 地福窯跡群 突帶双耳壺 c・突帶双耳甕 : 中池ノ内1号窯 突帶短頸壺 : 西谷池1号窯 突帶双耳短頸壺・平底甕 : 西谷池2号窯 小形甕 (上) : 古城5号窯

図2 西摂北部地域における須恵器の主要器種分類



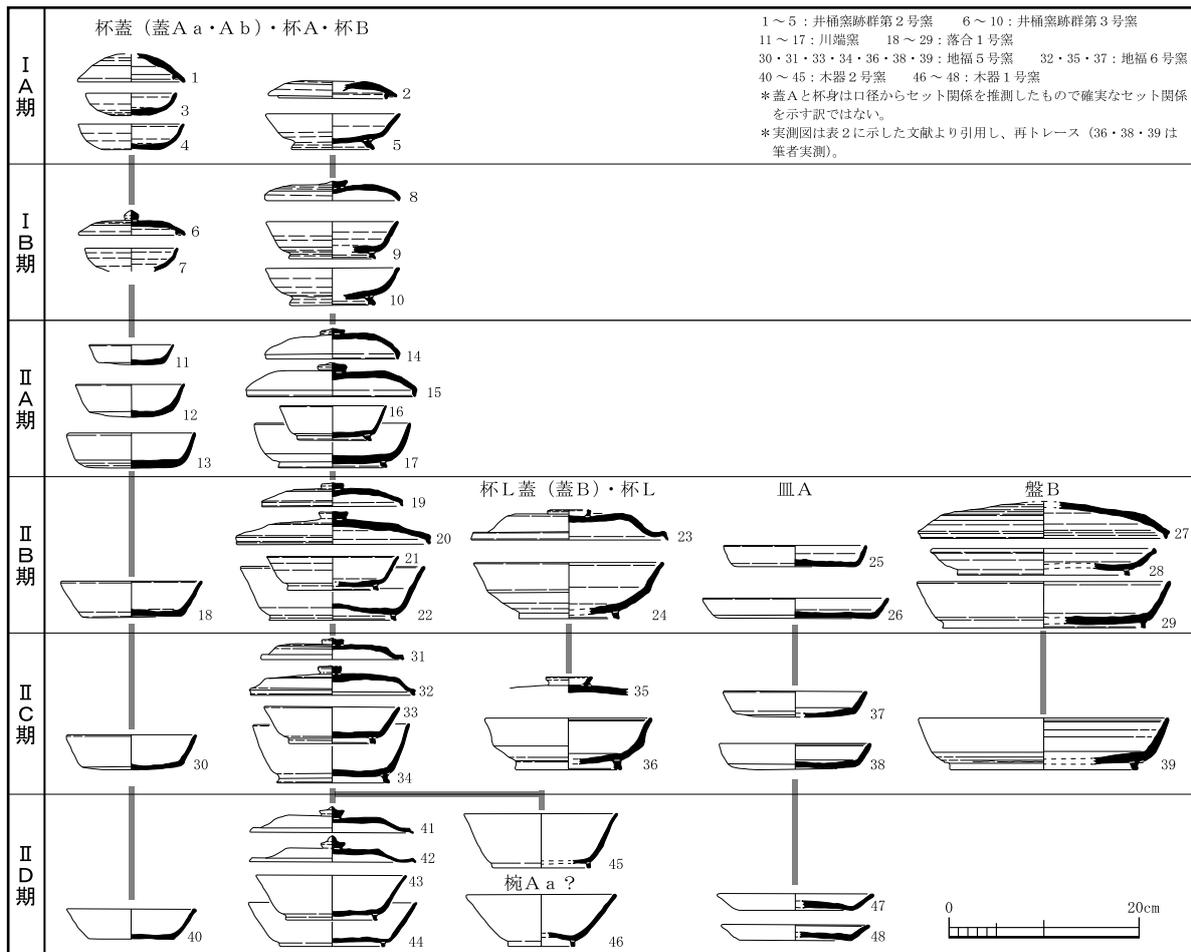


図3-1 主要供膳具の変遷概念図（I～II期）

38・39) がみられるようになる。

IID期 木器2号窯・同1号窯が該当する<sup>(3)</sup>。天井部が平坦で端部が屈曲する杯蓋が主体となる<sup>(4)</sup>。底径が小さく、椀A aとするか判断に戸惑うもの(46)もみられる。当期の基準資料はいずれも採集品のため、全容を捉えきれていない可能性があるが、大形の器種や金属器模倣器種は消失し、器種構成は単純になる。なお、内面口縁直下に沈線を施す皿Aは当期も生産される(48)。

III期 つまみのない杯蓋(蓋C)が生産される時期。現状の資料では、IID期との間に断絶がみられ、三田末窯跡群と相野窯跡群に須恵器生産が展開する。器種構成や製作技術などから2期に細分する。

III A期 貝谷窯が該当する。杯蓋(蓋C)に加え、椀A a・椀B a・皿F・皿V・耳皿などの施釉陶器模倣器種や突帯双耳壺aが出現する<sup>(5)</sup>。椀B aは体部にわずかな丸みをもつもの(50・51)と体部が直線的で底径の大きいもの(52)の2種が存在し、後者は貝谷窯のみで確認できる。

III B期 向上・古城1号窯・同2号窯が該当する。沈線椀B a、突帯椀が少量だが出現する。一部椀B aと沈線椀B a(59・60)は底部回転糸切りであり、新器種とともに新たな製作技術が導入された可能性を想定できる。貯蔵具では、壺A bの確実な事例が出現する。土師器模倣の煮炊具(羽釜・甕)も確認できるが、出土数の少なさから生産品であると積極的にみなすことは難しい。

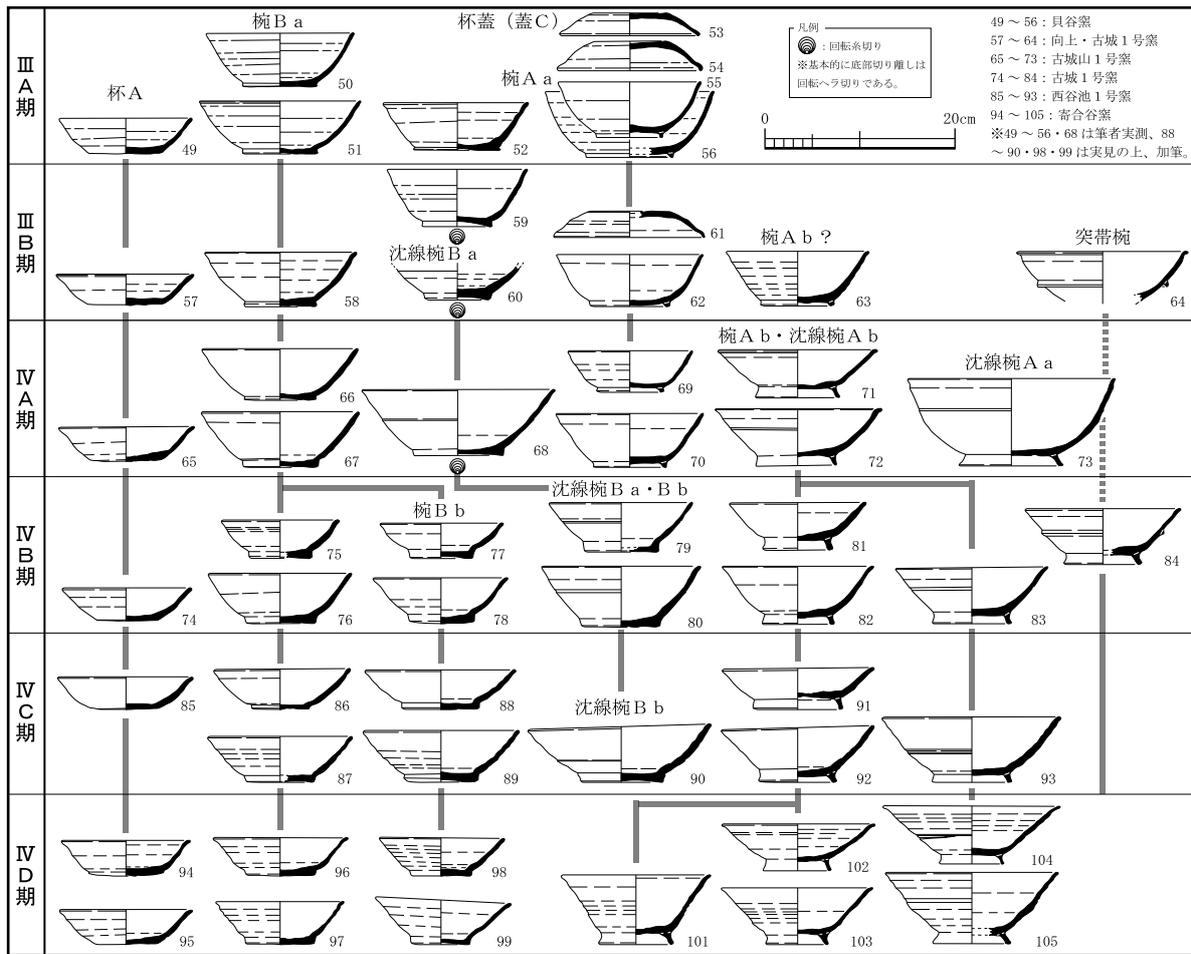


図3-2 主要供膳具の変遷概念図（Ⅲ～Ⅳ期）

Ⅳ期 杯蓋が消失し、碗が主要器種の一つとなる時期。相野窯跡群で須恵器生産がおこなわれる。

ⅣA期 古城山1号窯が該当する。全体の器種構成はⅢB期の流れを汲みつつ、碗A bの確実な事例、沈線碗A a・A bなどの器種が出現する。供膳具の構成は、碗A a・碗B a・沈線碗A aを主体として、少量の碗A b・沈線碗A b・沈線碗B aがみられ、碗の種類と法量が最も多様化した段階である（図4）。当期までは沈線碗B aに底部回転糸切りのもの（68）が確認できる。注目すべきは、口径18.0cmを超える沈線碗A a・B aが沈線碗の主体となる点である（図4）。つまり、当期の沈線碗は規格と装飾の双方において、他の供膳具とは一線を画する特殊な器種として製作されたものと想定できる。なお、相野窯跡群の中でも北西に位置する水ヶ下支群は当期に属する（山崎2010）。

ⅣB期 古城1号窯などが該当する。底部と体部の境が丸い杯Aがみられるようになる。また、具体的な比率は提示しえないが、内面見込みに段を有する碗B bが出現・増加する。碗Bの口径は13.0cm代にピークを有し、全体に小さくなる（図4）。前段階で一定量生産された碗A a・沈線碗A a・皿F・皿Vなどが消失する。当期以降の沈線碗は通常の碗と口径の分布が重なるものが主で、口径の大きいものがほとんどみられなくなるなど、沈線碗の特殊性が前段階より希薄になったものと評価できる。貯蔵具では突帯双耳壺cが出現し、土師器模倣の煮炊具（羽釜・甕・小形甕）が生産されるの

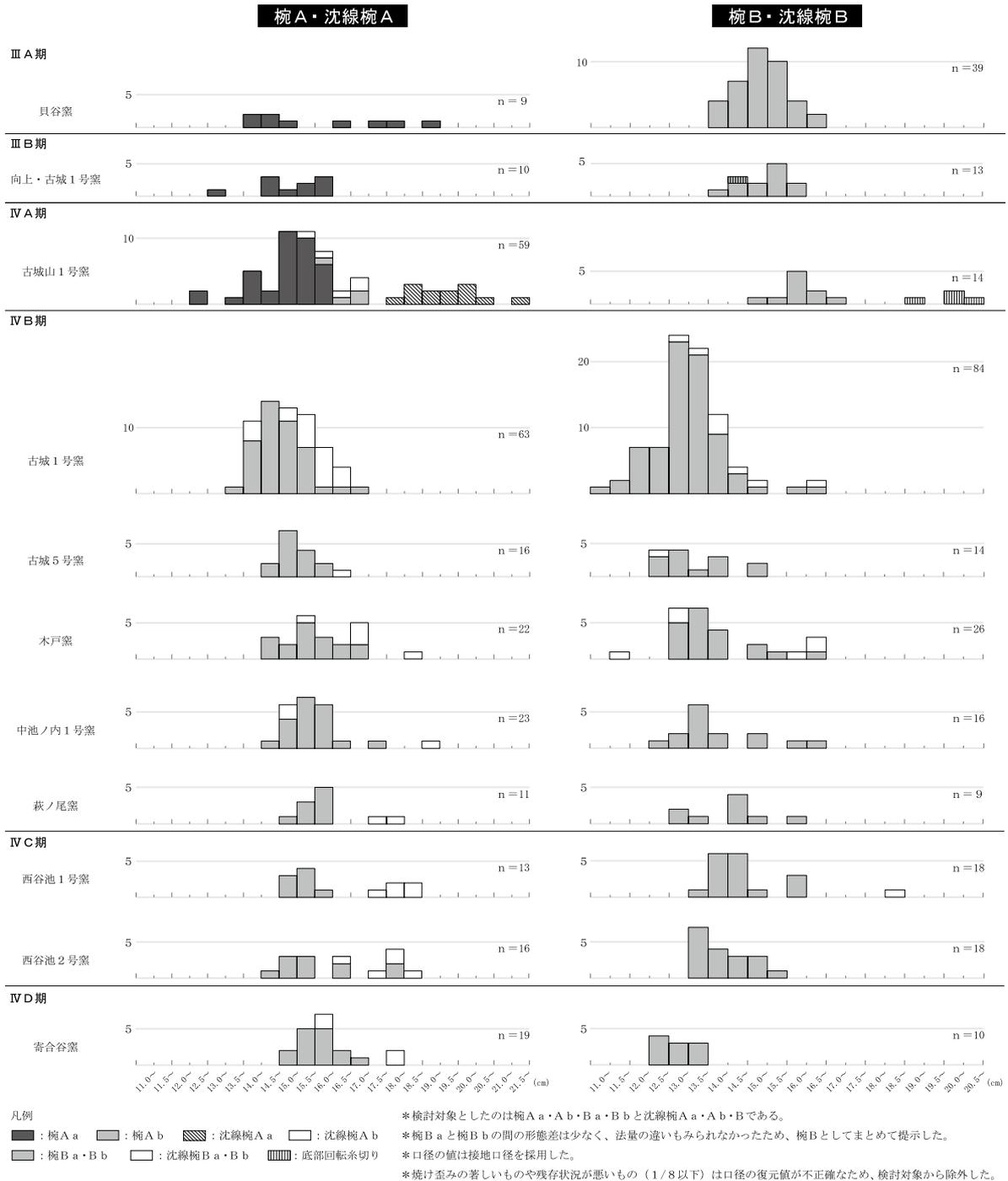


図4 椀の口径分布

も当期の特徴である<sup>(6)</sup>。底部の切り離し技法は回転ヘラ切りに統一される。

IV C期 西谷池1号窯・同2号窯が該当する。椀Bの口径の範囲が狭まっていくとともに、杯Aに近い、口径に対して器高の低い椀B(86・88)がみられるようになる。貯蔵具では、平底甕が出現する。

IV D期 寄合谷窯が該当する。沈線椀B・突帯椀が消失し、椀の口径分布もまとまりをみせるなど(図4)、器種構成と法量はIV期の中で最もシンプルとなる。椀A bは口径に対する底径が小さいもの(102・103)、器高の高いもの(101)がみられるようになる<sup>(7)</sup>。また、底部がわずかに突出する杯

A（94）や器高の低い椀B（96・98）がみられ、両者は器形・法量ともに近似するため、一見して杯か椀かの区別がつかないものが増加する。両者の境が当期に不鮮明になったと評価しうる。

V期 井ノ方窯跡、見比窯跡群が該当する。IV D期との間には大きな断絶を有する。いわゆる中世的な須恵器の様相で、器種は椀D・小皿・鉢に限られる。いずれの製品も底部は回転糸切りである。

### （3）実年代の検討－各期の推定年代－

本節では各期の実年代を検討する。ただし、年代を推定できる良好な消費地資料はなく、他地域との併行関係も現在検討中のため、本論の内容は暫定的であることを予め断わっておく。

I期 I・II期は実年代を推定できる資料がない。そこで都城の編年や器種構成の変遷（小田2014、神野2005、上村1994）を参考にする。まず、器種構成や杯蓋・杯身の形状から、IA期は飛鳥IV、IB期は飛鳥Vに併行すると考えており、I期を7世紀後葉頃に比定する。

II期 IIA期は蓋Abと杯Bの形態、長頸壺（壺K）の存在から平城I・II段階に併行すると考え、8世紀第1四半期頃に比定する。IIB期は蓋Abの形態、杯E・杯L・皿A・皿B（盤B）・壺Aaが出現することから、平城II・III古段階併行、8世紀第2四半期頃に比定する。IIC期は蓋Abの形態から平城III新・IV段階に併行すると考え、8世紀第3四半期に比定する。IID期は、供膳具の形態が平城V段階や平安京I中段階の資料と類似するため、8世紀第4四半期～9世紀初頭頃に比定する。

III期 III期の年代は課題である。IIIA期の貝谷窯、IIIB期の向上・古城窯跡群はII期との間に断絶がみられ、他生産地との関係を精査した上での年代検討が求められる。ここではひとまず両窯の施釉陶器模倣器種の椀B・皿F・皿Sなどが平安京近郊の緑釉陶器編年のII期の資料（高橋2003）に近い点に注目し、報告書の指摘やIVA期の年代も踏まえつつ、III期を9世紀後葉に比定しておく。

IV期 IVA期の古城山1号窯は東播磨神出窯の鴨谷1号窯と、IVB期の古城1号窯は鴨谷3-2号窯と器種構成が類似すると指摘されており（森内2011）、筆者も同感である。鴨谷窯の年代から、IVA期を10世紀前葉、IVB期を同中葉に比定しておく。

IVC期・IVD期は相野窯跡群独自の変化をなしているとみられ、他生産地との比較が困難である。ただし、11世紀後半には中世土器を特徴づけるセット関係（椀・皿・鉢・甕）が成立する（中井ほか2022）ため、そのような様相のみられないIVD期の年代は下がっても11世紀前半と推断する。IVA・IVB期の年代を考慮し、IVC期を10世紀後葉、IVD期を11世紀前葉としておく。

V期 生産された鉢は、東播系須恵器鉢との類似が指摘される（松本2012）。この点に注目すると、V期の鉢は口縁端面がナデによりわずかに窪む特徴を有し、12世紀後半～13世紀初頭の年代が想定されたIII-1類の須恵器鉢（佐藤2022）に類似する。V期の年代も同時期に比定しておく。

### （4）小結

以上、西摂北部地域の須恵器編年を再検討してきた。I・II期については先行研究と大差ない内容であったが、III・IV期の相野窯跡群については報告書とは一部異なる変遷を示した。具体的に述べると、報告書（兵庫県教育委員会1992）では、古城1号窯・同5号窯（III期）→西谷池1号窯（IV期）→中池ノ内1号窯（V期）→西谷池2号窯・寄合谷窯・萩ノ尾窯（VI期）→木戸窯（VII期）の変遷が

示されたが、本論では、特に木戸窯、萩ノ尾窯の相対編年における位置を大きく上げ、寄合谷窯を最終段階に位置づけた。結果、相野窯跡群では生産終焉に向かう中で、器種構成が単純になること、椀(特に椀B)の法量が単一化していくこと、古くから主要器種であった杯Aと9世紀代に出現する椀Bが近似していき、両者の境が不明瞭になっていくことなどが新たに明らかになった。

#### 4. 須恵器生産の展開・変容とその評価

最後に本章では、当該地域における須恵器生産の展開とその意義について、予察的に論じたい。

まず、I・II期は三田末窯跡群を中心に、7世紀後葉から9世紀前後まで須恵器生産が継続するが、このような消長は各地の須恵器生産地、とりわけ一郡一窯の地域など郡レベルの生産地を中心に確認でき(菱田2002)、消長のみ注目すれば、摂津国有馬郡域を経済圏とする郡レベルの生産地であったと理解できよう。その場合、生産主体として郡領層が干渉した可能性も想定できるかもしれない。

次に、III期は須恵器生産が再度展開する段階である。生産の契機と主体は今後の課題だが、施釉陶器模倣器種や回転糸切り技法の存在などから、開窯に際し、丹波篠窯など平安京近郊窯からの技術導入が想定されてきたことは、2章でも述べた。この点について、貝谷窯はさておき、向上・古城窯跡群では篠窯で生産されない沈線椀や突帯椀が存在することに注意が必要である。これらは主に東播磨諸窯において生産された器種であり、当該期の技術導入関係については、視野を広げつつ、再度資料に即した検討が必要であろう。

IV期は相野窯跡群で須恵器生産がなされ、確認された窯の数に鑑みれば、IV A・IV B期が最盛期とみなせる。器種構成では、杯蓋が消失し、椀が主体になるなど、大きな変化がみとれる。このようなIV期の中でも筆者が特に重要と考えるのは、IV D期へと器種構成が単純化していく中で、杯Aと椀B、主要な2器種の差異が不明瞭になる点である。その兆しは、IV C期にみえ、IV D期にさらに進む。なお、同様の状況は、器種こそ異なるが、同時期の丹波篠窯でもみられる、各器種の規範の崩壊、供膳具生産の簡略化の結果と理解されている(西浦2024)。中世の須恵器生産は器種構成が古代と比べて単純で、椀は基本的に法量・形態ともにバラエティが少なく、古代の様相とは大きく異なる。器種構成の単純化、篠窯と相野窯跡群でみられた供膳具の差異の消失は、中世的な須恵器生産への移行過程の一端として重視できよう。このように、相野窯跡群は中世的な生産へと確実に近づきながらも、IV D期に生産終焉を迎えた。終焉の背景や須恵器工人のその後は今後の検討課題である。

最後に、V期については、IV D期との間に長期の断絶があること、東播系須恵器鉢の類似品が生産され、同時期に各地で同様の生産地がみられること(松本2012)を踏まえると、東播磨から生産技術が導入された可能性も想起され、東播系諸窯を中心とするより広範な動きの中で評価すべきである。

#### 5. おわりに

本論では、西摂北部地域の須恵器生産地を対象に、編年を再検討した。特に相野窯跡群については、先行研究とは異なる相対編年を示し、中世的な須恵器の直前段階への変化をより明瞭にできた。ただ

し、紙幅に対し、長期の変遷を大づかみにする構成としたため、論じ残した課題も少なくない。今後は編年の実年代を精査し、製品や製作技術の分析を通して、他生産地との併行関係や技術系譜を明らかにする必要がある。また、窯体構造や生産主体も合わせて議論せねばなるまい。これらの課題については、古代から中世への窯業生産の変化を解明するためにも、周辺諸窯を含めて追究していきたい。

## 謝辞

資料の実見・検討に際し、以下の方々・機関から多大なご助力を賜った。記して感謝申し上げます。（敬称略・五十音順）

篠宮正、菱田淳子、藤原怜史、松岡千寿、森内秀造、兵庫県立考古博物館

## 註

- (1) 地福2号窯は、窯体内から皿Aや長頸壺（壺K）が出土していること、杯Bの様相などからⅡB期の可能性が高いと考えるが、杯蓋は一連の変化に位置づけられない特異な形状であったため、判断を保留した。なお、地福窯跡群では近接して6基の窯跡が検出されており、灰原資料をいずれの窯跡に帰属させるかの判断は困難な場合が多い。したがって、本論では基本的に窯体内の資料のみを扱う。
- (2) 地福4号窯は、窯体内から杯Bと内面口縁直下に沈線を施す皿Aが出土しており、それらの様相からⅡC期に該当する可能性が高いと考えるが、杯蓋の実態など、不明瞭な点が多いため、判断を保留した。
- (3) 地福1号窯は8世紀後葉の年代が想定されており（菱田2010）、筆者も杯Bの形状などからⅡD期に該当する可能性を考えるが、窯体内出土資料につまみを有する杯蓋が確認できないため、判断を保留した。
- (4) 木器2号窯では蓋A bと蓋Cがみられると記される（津川2010：651頁）。ただし、実測図は提示されておらず、過去の報告（高島1984 b）でも蓋Cは確認できない。これが生産されていれば、当窯の編年における位置づけを変更する必要があるが、存在の不確かさから、ひとまずⅡD期に置く。なお、仮に蓋Cが生産されていたとしても、本論のⅢA期にあてた資料との間に断絶があることは変わりなく、以降の行論に影響はない。
- (5) 双耳突帯壺aは本論Ⅱ期（後述するがおよそ8世紀段階）に該当する地福窯跡群でも確認されている。ただし、突帯双耳壺は窯体内ではなく灰原からの出土で、8世紀段階の資料に双耳突帯壺が含まれる事例は地福窯跡群以外に確認できない。筆者は突帯双耳壺が平安時代以降に盛行する器種と考えており、地福窯跡群出土資料の評価に検討の余地はあるものの、西摂北部地域においてもⅢA期に出現するものとする。
- (6) なお、萩ノ尾窯は椀A b・椀Bの形態などからⅣB期に属すると考えるが、法量や器種構成（煮炊具の生産がほぼみられない）などに独自性が顕著で、他の窯と細かな差異が多数みられる。ⅣB期・ⅣC期間に萩ノ尾窯をもって一期を設定することも考えたが、時期差とする明確な根拠を持つこともできなかった。独自性の背景には、当期に複数の工人集団が須恵器生産に従事し、工人集団によって生産内容に若干の違いがあったと推測する。
- (7) 当期の椀A b・沈線椀A bは体部のロクロ目が顕著である。また、器壁が薄くなった結果（口縁端部付近の厚みが0.15cmのもの存在）、全体に歪みの著しい資料も多く、これらの特徴も他の時期との違いとして挙げられる。

参考文献（紙幅の都合により、副書名やシリーズ名を一部割愛）

- 稲本悠一 2023 「奈良時代の地方における須恵器生産の展開－丹波国と周辺の諸窯を事例として－」『洛北史学  
第 25 号 洛北史学会
- 岡崎正雄 1992 「第 13 章 まとめ」『相野古窯跡群』兵庫県教育委員会
- 小田裕樹 2014 「4 土器群の位置づけ」『奈良山発掘調査報告Ⅱ』奈良文化財研究所
- 片山博道 2009 「平高台椀の基礎的研究－生産地の様相－」『考古学の視点 兵庫発信の考古学』間壁葎子喜寿記  
念論文集刊行会
- 上村憲章 1994 「第二章 土器と陶磁器 3 須恵器」古代学協会・古代学研究所『平安京提要』
- 佐藤亜聖 2022 「東播系須恵器」日本中世土器研究会編『新版 概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
- 神野 恵 2005 「3- 1- 3 土器類」奈良文化財研究所『平城宮発掘調査報告Ⅶ 兵部省地区の調査』
- 菅本宏明 1993 「東播系須恵器出現期における摂播国境地域の土器様相」『考古論集－潮見浩先生退官記念論文  
集－』潮見浩先生退官記念事業会
- 高島信之 1984a 「見比窯址採集の須恵器について」『三田考古』第 13 号 三田市教育委員会
- 高島信之 1984b 「木器窯址群採集の須恵器について」『三田考古』第 14 号 三田市教育委員会
- 高橋照彦 2003 「平安京近郊の緑釉陶器生産」『古代の土器研究－平安時代の緑釉陶器・生産地の様相を中心に－』  
古代の土器研究会
- 津川千恵 2010 「131 井桶窯跡群・乾窯跡」三田市史編さん担当編『三田市史』第 8 卷（考古編）三田市
- 中井淳史・佐藤亜聖・新田和央 2022 「近畿」日本中世土器研究会編『新版 概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
- 西浦 熙 2024 「篠窯跡群における平安時代須恵器供膳具の変遷－西山 1 号窯の位置づけを中心に－」『篠窯跡  
群西山 1 号窯の研究』大阪大学考古学友の会
- 菱田哲郎 2002 「考古学からみた古代社会の変容」『平安京』（日本の時代史 5）吉川弘文館
- 菱田哲郎 2010 「135 地福窯跡群」三田市史編さん担当編『三田市史』第 8 卷（考古編）三田市
- 兵庫県教育委員会 1987 『青野ダム建設に伴う発掘調査報告書（1）』
- 兵庫県教育委員会 1988 『青野ダム建設に伴う発掘調査報告書（2）』
- 兵庫県教育委員会 1992 『相野古窯跡群』
- 松岡千寿 2022 「第 4 章 まとめ 第 3 節 三本峠北窯跡の評価」『兵庫県窯業遺跡調査報告書Ⅰ－三本峠北窯跡の  
調査－』兵庫県教育委員会
- 松本 彩 2012 「11 世紀～ 13 世紀における播磨の須恵器一鉢の生産について」『中近世土器の基礎研究』24  
（新世紀の土器・陶磁器研究）日本中世土器研究会
- 森田 稔 1991 「「石峯寺経塚」遺物の再検討」『神戸市立博物館研究紀要』第 8 号 神戸市立博物館
- 森内秀造 2010 「第 6 章 総括 第 2 節 出土遺物の検討」『神出窯跡群Ⅲ』兵庫県教育委員会
- 山崎敏昭 2010 「140 水ヶ下窯跡群」三田市史編さん担当編『三田市史』第 8 卷（考古編）三田市
- 山田清朝 1992 「第 7 章 向上・古城窯跡群の調査 第 9 節 小結」『相野古窯跡群』兵庫県教育委員会
- 吉田 昇 1988 「第 6 章 第 2 節 青野ダム周辺における須恵器生産について」『青野ダム建設に伴う発掘調査報告  
書（2）』兵庫県教育委員会